

# 戦争により破壊された喫歴史的遺構をめぐる

## 日本人女性たちの文化実践

### ——ロースドルフ城古伊万里再生プロジェクト

#### (ROIP) を事例に——

保科 眞智子

東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科  
アートプロデュース専攻 研究生

## 1. はじめに

「オーストリア・ロースドルフ城古伊万里再生プロジェクト (Reviving Old Imari Project, 以下 ROIP, 2018-2022)」とは、第二次大戦によって破壊されたままウィーン近郊の古城に眠っていた陶片群「ピアッティ・コレクション」を、日本人女性らの市民グループが中心となり再生させたプロジェクトである。コレクションの主体は江戸期の輸出磁器「古伊万里」だが、無残に砕かれた陶片の数はおよそ1万ピースにもものぼっていた。ROIPは、古陶片群を「平和の象徴」と位置づける城主一家の思いに共感し、コレクションの国際的認知のためのネットワークを構築した。活動は日喫友好150周年記念事業に認定され、展覧会の特別協力をはじめ、分野を超えた連携により両国を結ぶ様々な文化活動を展開し、現在も発展し続けている。

ROIPは、日本の専門家による初めての学術調査を支援した。その結果、陶片群には17世紀後半～18世紀後半の古伊万里をはじめとする貴重な作品が含まれることが判明した。また、コレクション全体が、東西の陶磁貿易史を俯瞰する構成となっていることも示された。学術的な裏付けを得たことで、ROIPは日本での特別展企画に漕ぎ着いた。陶片群の一部が300

年ぶりに帰国すると、各種メディアで話題となる。調査、修復の後、世界初の展覧会が全国4カ所の美術館にて盛会となった。

特別展「海を渡った古伊万里～ウィーン、ロースドルフ城の悲劇～」(2020～2022)は、会期中に新型コロナウイルスによる未曾有のパンデミックが災いしたが、東京、愛知、山口、佐賀の美術館を巡回し、述べ4万人を動員する成功を収めた。ROIPは本展に特別協力し、会期中は関連する文化イベントなどで広報活動を支援した。なかでも、古伊万里のふるさとしてである佐賀県立九州陶磁文化館にて主催したシンポジウムは、活動の集大成に位置づけられる。地元学生とオーストリア人城主との交流は、両者の友情を育み、地域文化の未来を担う若者たちの貴重な学びの機会となった。

ROIPの取り組みは、置き去りにされていた歴史的遺構の学際的な活用事例として、国際放送を含めたメディア50社以上に報道された。奇しくも巡回展の会期中に、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻(2022)が勃発した。世界が再び破壊行為を目の当たりにすることで、活動の意義はより一層深まった。日本での展覧会を終えて奥へ返却された陶片群は、本国でも注目を集めるようになる。国立ウィーン応用美術大学は、奥政府の支援による大型アートプロジェクトを始動し、ROIPとの共同が進んでいる。ロースドルフ城「陶片の間」を訪ねる人は増加し、日奥の観光や文化的な交流に期待をして、大阪・関西万博(2025)への参画も検討されている。

ROIPプロジェクトの中核メンバーは、発起人である筆者を含めて、40代～50代の日本人女性たちだ。彼女たちの多くは、日本社会における伝統的な「主婦」という属性に身を置き、ROIPとの関わりを通じて、価値観や生き方が大きく変化した。本稿では、ピアッティ・コレクションが引き寄せた奥一家と、ROIPメンバーである日本人の一般女性らとの協働に着目し、陶片群の再生プロジェクトについて報告する。その上で、ROIPプロジェクトがメンバーや関係者に与えた影響と社会的意義について、エスノグラフィの手法を用いて考察する。



主婦たちの熱意と奮闘は、分野を超えた社会的連携を実現していく。

写真は、ROIP 活動の紹介リーフレット作成風景。

## 2. 近世欧州における陶磁器蒐集

### 2-1. 陶磁器交易の歴史

#### 2-1-1. 東洋から欧州へ

陶磁器交易の歴史は古く、中国陶磁は 9 世紀から国際的な商品として海上航路でペルシア地域まで運ばれていた。その後、ヨーロッパに初めて磁器の情報をもたらしたのは、イタリアの商人で冒険家のマルコ・ポーロであると言われている。13 世紀末に編纂された『東方見聞録』には、明王朝時代の景德鎮で盛んに磁器が焼かれていたことが記されている。陶器や土器しか知らなかった西欧の人々にとって、東洋からもたらされる磁器は、透き通る薄さと一点の濁りもない透明感から、ポルトガル語でタカラガイを意味する「ポーセリン（porcelain）」と呼ばれ珍重された。王侯貴族たちは邸宅内を東洋磁器で埋め尽くすような飾り付けをするなど、蒐集はス

テイタスシンボルとなっていた。中でも当時、世界最大の蒐集家としてドイツ・ザクセン選帝侯アウグスト2世<sup>1</sup>の名が挙げられる。

### 2-1-2. 日本の磁器輸出と「古伊万里」について

日本と欧州の磁器貿易は、17世紀前半にオランダ連合東インド会社(VOC)<sup>2</sup>を介して始まる。わが国はもともと縄文土器をはじめとする陶器文化の歴史が長く、それと比較すると、国内の磁器生産の歴史は300年ほどと浅い。その始まりには、VOCの貿易相手国だった明が王朝末期の動乱期に入ったことで、景德鎮での磁器生産が滞った国際情勢がある。VOCは、西欧の熱狂的な磁器需要に応えるべく、代わりに日本へ発注するようになった。わが国最初の磁器は肥前国(現在の佐賀県有田町とその近辺)で生産され、VOCによって伊万里港から海路で遥か欧州まで運ばれた。こうした江戸期の輸出磁器を、出港の名称から「古伊万里<sup>3</sup>」と呼ぶ。短期間での高度な技術習得と洗練されたデザインが支持され、欧州のトップシェアに躍り出た。

18世紀後半に西洋で磁器生産が可能になると、日本の磁器輸出は一旦途絶える。そして、ウィーン万国博覧会(1873)を契機として第2のピークが到来する。技術革新による超絶技巧と斬新なデザインは、西洋の文化芸術にジャポニズム旋風を巻き起こした。明治以降の輸出磁器は、古伊万里と区別される。

## 2-2. 壺ピアッティ家と陶磁器コレクション

### 2-2-1. ロースドルフ城とピアッティ家について

ロースドルフ城の歴史は古く、11世紀に初期の記述が確認できる。ウィーン

---

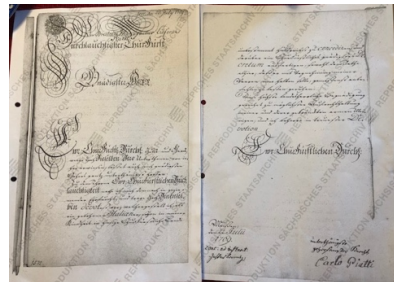
<sup>1</sup> アウグスト強王、1670-1733。王の命によりマイセン窯が誕生し、西洋磁器の歴史の幕が開けた。

<sup>2</sup> 世界最初の株式会社とされる。日本では長崎出島に拠点を置いた。1602-1799。

<sup>3</sup> 古伊万里とは、江戸時代に現在の佐賀県有田町とその周辺で生産された輸出磁器。伊万里港で荷積みされた木箱に「IMARI」と記されていたことから、そのまま西欧での呼称となった。

から北へ60キロ、ニーダーエストライヒ州に位置する古城で、千年前から要塞としてこの土地を守ってきた。四角い建造物と中庭は、有事に地域の住民や家畜をかくまう仕様だったという（写真）。15世紀のフス戦争、17世紀の三十年戦争、度重なるトルコの侵攻など、この地域はヨーロッパの度重なる侵略と破壊の舞台でもあった。

現在の城主であるピアッティ家は、北イタリア出身の元貴族で、11世紀の文献に初めて登場する。18世紀にはザクセン公国にて高い地位にあり、東洋陶磁の蒐集もこの頃には始まっていたと伝承されている。1820年代後半、ロースドルフ城をリヒテンシュタイン家より購入した。現在は8代目となる当主ガブリエル・ピアッティが、大規模な農園を営みながら先代のアルフォンス・ピアッティとヴェレーナ夫人ら家族とともに暮らしている。



左：ロースドルフ城外観。ウィーン近郊、チェコとの国境にほど近い。

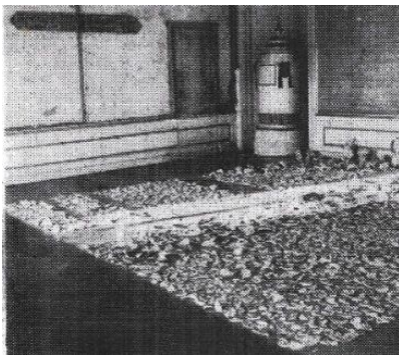
右：陶磁器取引許可証。ピアッティの署名が確認できる。

## 2-2-2. 戦争による「破壊」と陶片コレクション

20世紀に入り、城は再び戦禍に見舞われる。第二次大戦末期、喫は4カ国分割占領となり、ロースドルフ城は旧ソビエト軍によって接收された。当時の城主フェルディナンド・ピアッティが避難の際に地下に隠した陶磁器コレクションは、兵士たちに探し当てられ徹底的に破壊された。戦後、城に戻ったフェルディナンドは、至るところに散乱する陶片を目の当たりにし、陶片群を「平和の象徴」と位置づけて保存公開することを決意する。戦争がもたらす無意味さと、繰り返される愚行に対して断固反対する意志の表れた。

兵士たちは陶磁器をピストルの的にして弄んだのであろうか、陶片は城の中、森や畑などに散乱していた。フェルディナンドはそれらを家族や地域住民らと拾い集め、城の中に設置した美術館に収めた。城内の展示室として選んだのは、旧ソビエト軍が執務室として使用していた部屋だ。ロシア語の看板が壁に残るその空間を「陶片の間」と名づけ、1万ピースに及ぶ陶片を床一面に敷き詰めてインスタレーションとした。訪れる人は、時間が止まったその場にわが身を委ねる。整然と並ぶ無数の陶片から、破壊の記憶と平和への祈りを全身で感じずにはいられない（写真）。

フェルディナンドの遺志は子孫に受け継がれ、インスタレーションはほぼそのままの形で現在も公開されている。後に美術館を管理するようになったヴェレーナ・ピアッツィ<sup>4</sup>は、鑑賞者がインスタレーション全体を見渡せるように橋架を渡した。しかし、一家は「陶片の間」の存在を積極的に周知せずに来た。周囲からは「戦争の痛みを彷彿とさせる」「壊れたものに価値などあるのか」など否定的な反応が多かったからだ。筆者が初めて現地を訪れた2017年の時点で、展示期間は70年以上に及んでいたが、その存在を知る者はウィーン在住の人々にも、喫通とされる日本人の間にもいなかった。



左：1959年当時のロースドルフ城「陶片の間」。壁のロシア語看板は侵攻当時のまま。

右：床にぎっしりと敷き詰められた陶片群。

<sup>4</sup> ロースドルフ城前城主夫人。ROIPプロジェクトの共同発起人。2015年東京での茶会で筆者と出会ったことが、古伊万里再生プロジェクト発足のきっかけとなった。



左：現在のロースドルフ城「陶片の間」。陶片群はストライプ状に設置。

右：橋架が新たに加わり、展示室全体を見渡すインスタレーション。

ロースドルフ村は人口およそ 250 人の小さな集落だ。住民は陶片の存在を認識しており、現在も新たな陶片が畑などで発見されると、私物化したり新たなアートを製作したりと様々だ。その様子に対して、ピアッティ家は寛容である。ガブリエルは、幼い頃の思い出をこう振り返る。「『陶片の間』で展示品の陶片を一つずつ手で洗うんだ。母親や村のボランティアとね。手伝いをして小遣いをもらえるのが嬉しかったよ」。戦後のピアッティ家と地域の人々との関係性には、いつも陶片があったことが分かる(写真)。



左・右：ロースドルフ村の陶片アート。住民にとって陶片は身近な存在だ。

### 3. ロースドルフ城古伊万里再生プロジェクト（ROIP）

ROIP の活動は、ロースドルフ城に所蔵されていた 1 万ピースの磁片を題

材に「陶片をつなぐ、歴史をつなぐ、世界をつなぐ」を理念に掲げ、2018年から2022年までの5カ年に渡って日澳両国にて展開した。事務局に参画した7名のメンバーは、筆者と個人的な友人関係にある日本人女性たちであった。多くが帯同家族として海外在住経験があり、日頃から異文化や多様性に柔軟であった。しかし、主婦として家庭にいる時間が長く、社会で専門性を身に着ける機会には乏しかった。

後に世界配信された ROIP の特集番組（NHK 国際放送、2022）は、メンバーを以下のように紹介した。「全員が50才前後の主婦」「出産のために退職」「膨大な資料作成に果敢に挑戦した YY、コミュニケーション役の HN と ET、クリエイティブに SI、TS、TM、スポークスマンは保科」。また、インタビューでメンバーは「主婦の仕事の多くは目に見えない。その大切さを共有できているチーム（YY）」「ずっと家庭にいたので、プロジェクトで自分に何ができるか自信がなかったけれど、保科に背中を押されて飛び込みました（HN）」などと語った。6名が東京在住、唯一欧州在住の TM は、独語話者であり芸術活動に造詣が深いため、現地との仲介役として活躍した。

## ROIPの活動年表

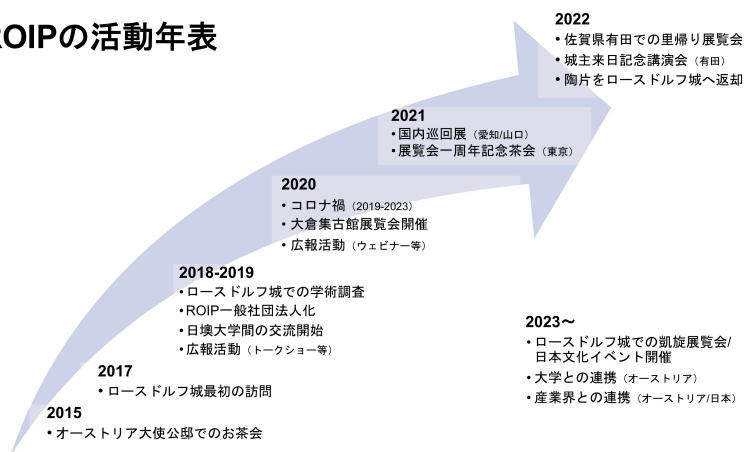


図1 古伊万里再生プロジェクトの歩み





古伊万里再生プロジェクトメンバー 活動期間中コロナ禍に見舞われたが、  
子育てや仕事と並行して ROIP に取り組んだ。

### 3-1. きっかけと目的—— 陶片コレクションの「再生」

ROIP が発足したきっかけは、茶道家である筆者が東京で催した茶会でのことだった<sup>5</sup>。アルフォンス・ピアッティ<sup>6</sup>夫妻は、初めて体験する茶の湯で工芸品に興味を示した。筆者が陶磁器の繕い文化<sup>7</sup>について伝えると、彼らはロースドルフ城所蔵の陶片群について話し始めた（写真）。

---

<sup>5</sup> 2015 年秋、当時の駐日オーストリア大使ベルナルド・ツィンブルクとラシミ夫人が、初来日する妹夫妻のために茶会を開いてほしいと筆者に依頼した。この出会いが ROIP 発足のきっかけとなった。ベルナルドはロースドルフ城城主夫人ヴェレーナ・ピアッティの実兄。

<sup>6</sup> フェルディナンドの曾孫、ロースドルフ城主。2020 年長男ガブリエルに家督を譲った。現在もヴェレーナ夫人と城に居住している。

<sup>7</sup> 漆による焼き物の繕いは 1 万年前の縄文土器ですでに確認できる。修復箇所を新たな景色に見立てる金継ぎは近年エコロジーの観点から世界的にも注目されている。



2015年、駐日オーストリア大使公邸での茶会で陶片の存在を知る。右から筆者、ピアッティ夫妻、実兄で大使(当時)のベルナルド・ツィンブルク、左端がラシミ夫人。

「我々はウィーン近郊の古い城に住んでいる。城には代々が蒐集してきた陶磁器があり、調度品として邸内を飾っていた。しかし、戦争でその殆どが破壊され陶片となってしまった。焼き物の出自について参照できる資料も焼失してしまった。陶片は大切に保管してあるので、日本の専門家に少しでも情報がもらえないか相談したい」。その後、送られてきた写真には、想像を絶する量の陶片が映し出されていた。筆者は、かねてより日本文化を通した国際親善に関心があったため、アルフォンスの話を聞き、協力の可能性を探るために行動した。

2017年夏、筆者が初めて現地を訪れた際、眼下に広がる陶片の海に立ちすくんでしまった。「陶片の間」は、戦争遺産を活用した芸術性の高いインスタレーションであった。東西の壮大な陶磁交易と、戦争による破壊という、真逆の歴史が交差する。まさに筆舌しがたい強烈な体験を経て、筆者は、ピアッティ・コレクションを歴史に埋もれさせておくべきではないと考えた。フェルディナンドの遺志を継ぎ、より多くの人にその存在を伝え、平和について考えるきっかけを届けたい。再生プロジェクトの構想をピアッティ家に提案したところ、アルフォンスはヴェレーナと筆者に対して「これは貴女たちが進めたらいい。レディースプロジェクトだね」と歓迎した。こうして筆者は、日本での企画を一任されることになった。

### 3-1-1. 協力者の獲得

この時点でのアルフォンスとヴェレーナは、「陶片の間」のインсталレーションを管理しつつも、その将来性を考えあぐねている様子であった。城の管理と、地元で経営する大規模農業で多忙なアルフォンスは、筆者に「割れた陶磁器なんてコレクションにもならない。すべての陶片を部屋ごと持ち帰ってくれないか」と冗談交じりに語った。陶片群は一族の歴史を伝える家宝だが、頭の片隅にいつもあるお荷物のもようでもあった。

裸一貫の筆者がまず着手したことは、協力者を探すことだった。資料をたずさえて周囲に話して回ると、筆者の呼びかけに応える有志が集まり、2018年に再生プロジェクトの事務局が始動した。全員が日本人女性、そして主婦であった。肩書きも実績もない、しかし確かな志と熱意にあふれた一般市民によるアートプロジェクトの船出である。その後も多方面にこの陶片コレクションの存在を伝え、調査の必要性を訴えるうちに、大倉集古館<sup>8</sup>館長の大倉喜彦には特別展企画を提案され、歴史家で日本陶磁史に詳しい荒川正明<sup>9</sup>から学術面で協力を得られることになった。

ROIPは、活動の社会的な信頼度を上げるため、2019年1月に一般社団法人化した<sup>10</sup>。また、支援者の呼びかけで集まった寄付を立ち上げ資金とした。偶然にも同年、両国は外交樹立150周年を迎え、駐日オーストリア大使館より日奥友好150周年記念事業に認定された。2020年6月には全日空と協定を締結した<sup>11</sup>。

### 3-1-2. ROIPプロジェクトチームについて

ROIPの活動は、「陶片をつなぐ、歴史をつなぐ、世界をつなぐ」を理念に掲げ、2018年から2022年までの5カ年に渡って展開した。筆者を含めた7名の事務局メンバーは、展覧会支援やアートプロジェクトの経験は特

---

<sup>8</sup> 日本初の私立美術館。東京都港区。運営は公益財団法人大倉文化財団。特別展「海を渡った古伊万里～ウィーン、ロースドルフ城の悲劇～」(2020年11月～2023年3月)を主催。

<sup>9</sup> 学習院大学教授。専門は日本陶磁史。主著に『板谷波山の生涯』(河出書房新社, 2001)。

<sup>10</sup> 一般社団法人古伊万里再生プロジェクト、通称 ROIP Japan。代表理事は筆者。2019年1月設立。

<sup>11</sup> 産業界とも連携し、ROIPの協賛企業は10社を超えた。

になく、全てが手探りで進むほかなかった。活動は、主にオンラインのチャットツールや会議ツールを駆使したりリモートワークで行っていたが、これは子育てやパートタイムの仕事に従事する女性メンバーにとって好都合だったからである。コロナ禍<sup>12</sup>以前の日本社会では、こうしたオンラインで活動を進める組織はまだ少数派であったが、海外在住のメンバーとの協働も可能となるなど利点も多かった。世間では副業やパラレルワークの可否が議論されるなか、ROIP事務局はすきま時間を有効に使いながら、実に軽やかに活動していた。奇しくも世界がパンデミックに見舞われたこともあり、7名全員が初めて対面で顔を合わせたのは巡回展も終盤の頃だった。

メンバーによる陶片コレクションの献身的な周知活動により、専門家、メディア、協賛企業、個人の賛同者など、人々をつなぐ社会的なネットワークが構築された。主催の美術館、監修者、そして終始変わらないピアッティ家との協力関係は、活動を通して大きな支えとなった。しかし、その道のりは決して平坦ではなく、実績も肩書きも示せない女性たちの声はなかなか届かなかった。当初は「専門家でもないのに出過ぎている」「どんなリターンを期待しているのか」「予算はあるのか」など、厳しい反応が続いた。

陶片のストーリーを伝える場として、ROIPは美術館を選んだ。公に開かれた教育機関という観点からだったが、企画を持ちかけたいくつかの美術館は、割れた陶片の美術的な価値に疑問を呈して、展示に難色を示した。ROIPはオーストリアにゆかりのある個人や団体に働きかけ、現地への研究者派遣の道筋を立て、陶片の日本への里帰りや展覧会を実現するために粘り強く模索を続けた。その結果、活動そのものが国際交流に資するとの評価から、駐日オーストリア大使館・文化フォーラム、日墺協会、日墺文化協会から迅速に後援がついた。活動の広がりを受けて、駐オーストリア日本大使館の支援も加わった。活動は多くのボランティアに支えられた。

---

<sup>12</sup> 新型コロナウイルス感染症。2019年に発生、感染者数は2022年8月までに6億人を超え世界的流行をもたらした。ワクチン普及や治療法の確立により2023年5月に世界保健機構（WHO）は緊急事態宣言を終了。

## 3-2. 陶片をつなぐ

### 3-2-1. 学術調査について

ROIP が発足すると、メンバーたちは陶片コレクションの「再生」に乗り出した。再生には、修復のみならず、背景にある物語性に光を当てる意図があった。美術館の展示品として、陶片に学術的な価値が認められるのか。その答えを得るために、筆者は、学術調査の結果を踏まえて今後の展開の布石としたい考えがあった。

2018年3月、専門家による初めての調査が、ロースドルフ城「陶片の間」にて実施された<sup>13</sup>。その結果、同コレクションの陶片の数はおよそ1万点にのぼることが判明し、陶片の断面からは釉薬や焼成時の情報が引き出された。陶片群には日本、中国、西洋など国際色豊かな産地が特徴づけられ、その構成内容から、東西の陶磁貿易史の一端を解き明かす貴重な研究資料であることが大卒で鑑定された。ROIP は調査と並行してメディアとの連携を進め、調査の第一報は日本全国に報道された<sup>14</sup>。

調査をした荒川は、陶片の量を「まさに想像を絶するもの」と語った。また、「日本の研究者が欧州の調査現場でイニシアチブをとることは稀有なこと」として調査団派遣の意義を認めつつも、「これだけのものを放置してきたとは、欧州の研究者は何をしていたのか」と驚きを隠せない様子だった。

2018年10月の本調査は、「陶片の間」にて1週間に渡って行われた<sup>15</sup>。参加者は、荒川、同研究室の大学院生、修復家、ROIP 関係者のボランティアから成る総勢13名だった。毎朝9時から日が陰り始める午後3時ごろまで、ジグソーパズルを合わせるような作業が続いたが、一行は終始明るい雰囲気を取り組み、城主一家は農園のりんごを差し入れるなど協力的であった（写真）。

---

<sup>13</sup> 第1回調査は荒川正明（学習院大学教授）および日高薫（国立歴史民俗博物館教授）が担当。日高の科学研究費助成事業として実施した。

<sup>14</sup> NHK 全国ニュース、2018年12月2日正午および19時放映。

<sup>15</sup> 東京倶楽部文化活動助成金事業。



左：「陶片の間」調査風景。右：今でも城の地下を掘ると陶片が現れる。

調査の結果、ピアッティ家に伝わる陶磁器コレクションは、江戸期の古伊万里をはじめとする日本の輸出磁器、チャイニーズ・イマリと呼ばれる清朝の輸出磁器、マイセンやアウガルテン（初期ウィーン窯）などの西洋磁器で構成されることが分かった。蒐集の範囲は東西の壮大な陶磁器貿易史を網羅するもので、ピアッティ家の歴代が陶磁器をこよなく愛していたことがよく分かる。また、コレクションが不幸な戦争で壊滅的な打撃を受けたことは、見方を変えると、一般的には時を経ることで辿る作品の譲渡や盗難などの散逸を、本コレクションは免れる結果となったと言える。割れてしまった陶磁器には、誰も魅力を感じなかったのだろう。しかし、荒川は陶片群を「1945年以前の一括資料」と表し、1万ピースの瓦礫の山には「陶片の断面から様々な情報が読み取れる純度の高い資料」という新たな評価が加わった。

### 3-2-2. 修復について

調査の結果を受けて、荒川の提案で一部の作品の修復を行うことになった。修復を施すことで往時の姿を蘇らせ、調度品として邸内を飾っていた時代を彷彿とすることができる。修復は、荒川の推薦で、陶磁器修復の第一人者である繭山浩司が請け負うことになった。

修復品第1号は、欠けた箇所が全く分からないほどの完璧な復元だった。素晴らしい技術だったが、ヴェレーナはなぜか気に入らない様子であった。「なぜこんなに完璧に直してしまったの?」「過去の痛ましい破壊の史実を消し去って、何事もなかったかのような美しさだけが残ることになる」「私たちはそれを望まない」という言葉に、仲介役を担った筆者は雷に打

たれたような感覚に陥った。こうした齟齬が積み重なることで、お互いの信頼を失う事態は避けなければならない。筆者はこの一件を通して、プロジェクトリーダーとしての自覚を強めた。また、事務局メンバーもより一層主体的に関わるようになった。ROIPはこの一件から「再生」の定義を、陶片の復元を目指すのではなく、コレクションそのものの存在に再び光を当てるものと再確認した。

ROIPは文化財修復に関して、教育的な観点から、東京藝術大学の北野珠子<sup>16</sup>と同研究室学生2名を支援し、ロースドルフ城「陶片の間」における学術調査を実施した<sup>17</sup>。普段は工房にこもって修復品を扱う学生らは、国際的な現場へ足を運んで得た経験を活かして講演会を企画し、筆者の登壇を実現した<sup>18</sup>。この時のオンライン講演を視聴した専門家は、後に書籍の中で「破片となっても作品の持つパワーは、受け取り側次第でいくらかでも大きくなることを学んだ」と感想を寄せた<sup>19</sup>。

2019年12月、展覧会への出展準備のため、陶片コレクションの一部が300年ぶりに日本へ帰国した。その頃、武漢にてコロナウィルスが発見され、その3ヶ月後には世界中に猛威を振るう。まさにパンデミック前夜の里帰りとなった。

### 3-3. 特別展「海を渡った古伊万里～ウィーン、ロースドルフ城の悲劇～」特別協力

筆者は、学術調査の支援と展覧会開催の交渉をほぼ同時に行った結果、大倉集古館の主催が決まった。同館は、ピアッティ家との協働に合意し、

---

<sup>16</sup> 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復工芸教授。フランス・セーブルにて戦争遺産の修復に当たった実績がある。

<sup>17</sup> 2019年12月14日～18日に実施。調査報告「日本陶磁器コレクションの破壊と保全」北野珠子、「博物館研究」2021年8月号掲載。調査はROIP協力、全日空協賛。

<sup>18</sup> I LOVE YOUプロジェクト、東京藝術大学主催。2020年10月31日。コロナ禍でオンライン開催に変更。『文化財と戦争』「文化を通じて繋がりを生む」保科眞智子。

<sup>19</sup> 石原道知（古谷嘉章・堀江武史との共著）『縄文の断片から見えてくる：修復家と人類学者が探る修復の迷宮』古小鳥舎、2023。

展覧会の監修を荒川に、陶片の修復を繭山に依頼した。特別展・巡回展の業務委託は、株式会社キュレーターズが請け負った。ROIPは、ロースドルフ城とともに本展の特別協力を名を連ね、関係者との連携を取りながら、主に広報活動に従事した。およそ10ヶ月の修復作業を経て、2020年11月、大倉集古館にて特別展「海を渡った古伊万里〜ウィーン、ロースドルフ城の悲劇」が開幕した<sup>20</sup>。

同展には、ピアッティ・コレクションから陶片が約700点出品された。戦争で壊された陶磁器を展示するという前代未聞の展覧会は、「陶片の間」の再現や、陶片と完品<sup>21</sup>の並列展示をすることで、鑑賞者に重層的なメッセージを伝える内容となった（写真）。修復品の31点は、組み上げ修復という部分的な繕いに留めることで、破壊と再生を想像させる余地を残した<sup>22</sup>。

新型コロナウイルスの世界的な蔓延で、展覧会も大きな打撃を受けた。2021年1月、東京都は緊急事態宣言を発令し、安全とされた美術館も一時休館を余儀なくされた。その間もROIPは講演会<sup>23</sup>や音楽会など、会期に合わせて安全な文化イベント<sup>24</sup>を企画し、同展を広報面で継続的に支援した。美術専門誌が展覧会について報じるなか、一般市民によるROIPの活動はテレビ、ラジオ、通信社、海外メディアにも取材された<sup>25</sup>。反響はSNSやロコミでも広がり、宣言解除後、会期は同年3月まで延長された。来館者層は美術ファン以外にも裾野を広げて、親子3世代や近隣のビジネス街からも集客し、のべ15,000人の来場者を数えた。

---

<sup>20</sup> 海外初の展覧会。ロースドルフ城「陶片の間」を再現した。2020年11月3日～2021年3月21日（東京都の緊急事態宣言発令により一時休館、会期延長）。

<sup>21</sup> 佐賀県立九州陶磁文化館の所蔵作品。日本の磁器生産の歴史を伝える。

<sup>22</sup> ピアッティ・コレクションのうち698点の陶片が展覧会出品のため日本へ帰国した。修復された作品数は、部分修復7件、組み上げ修復18件、その他修復6件となった。

<sup>23</sup> ROIP主催オンライン講演会（日本語／英語）、大倉集古館（日本語、対面）、オーストリア大使館商務部（英語、対面）、日米婦人会（英語、オンライン）ほか多数。

<sup>24</sup> 茶会、講演会、食事会などを実施。ROIPに賛同するアーティストたちが集い、コンサートも催した。

<sup>25</sup> 国内メディアの他、ジャパントイムズ、ドイツ通信社、NHK国際放送など海外へも配信された。





左：特別展「海を渡った古伊万里～ウィーン、ロースドルフ城の悲劇～」に「陶片の間」を再現。右：大倉集古館特別展にて、駐日オーストリア大使エリザベート・ベルタニョーリと筆者。

巡回展は、荒川の発案で実現した。愛知県陶磁美術館（2021年4月～6月）、山口県立萩美術館・浦上記念館（2021年9月～11月）での特別展だ。「東京での成功が地方に波及する」のが巡回展の常識とのことだったが、それぞれやきものに縁のある土地の特徴を活かした展示内容は各地で好評を博した。長引くコロナ禍の最中だったが、各館およそ10,000人ずつの来場者があった。

ROIPはこの間、SNSでの告知活動を精力的に展開した。また、経費を削減するために、ウェブサイトの公開、動画やリーフレットなど活動資料の制作、イベント告知用のチラシ、名刺デザインや印刷に至るまで自分たちで行った。言語はいずれも日本語と英語を併用して、国内外への発信を意識した。ROIPメンバーの女性たちによる奮闘と熱意に打たれて、専門家も力を貸すようになった。なかでも、匿名の有志が制作した活動紹介の動画は、美術館の4会場すべてで流され、来場者はROIPについて知ることができた。



左：企画展は全国4つの美術館を巡回して約4万人を動員した。  
右：ROIPは多数の文化イベントを企画運営して広報活動を展開。  
ロンドンを拠点に活躍するピアニストの平井元喜らが協力した。

### 3-4. 歴史をつなぐ

#### 3-4-1. 佐賀県への里帰り

佐賀県立九州陶磁文化館での巡回展は、同県議会議員の原田寿雄<sup>26</sup>がキーパーソンとなって実現した。しかし、当初の計画にはなかった同館での開催は、一筋縄ではいかなかった。九州陶磁文化館は、主に九州全体の陶磁器資料の展示と歴史を紹介する公立美術館だ。所在地の佐賀県有田町は、江戸期に最初の輸出磁器が焼かれ、現在も柿右衛門窯をはじめとする我が国数々の窯業の産地である。ROIPは発足当初より、数奇な運命を辿ったロースドルフ城の古伊万里を名実ともに「お里帰り」させることで、再生プロジェクトの意義を高めたいと考えていた。原田もROIPに共感し、有田での周知と県の理解のために骨を折った。筆者も、東京での会期中に佐賀県の関係者を案内するなどして関係性を築いた。

特別展の誘致は同県でも議論され、古伊万里のふるさととして歴史を語り継ぐ意義は評価された。しかし、予算の確保がハードルとなり、作品の貸出しには応じられるが「巡回展を主催することは断念する」という通達があった。

---

<sup>26</sup> 佐賀県有田町選出。ROIP発足時より協働を模索し続け、佐賀県議会との調整に尽力した。

一方、東京での展覧会はメディアにも多く取り上げられ、「なぜ有田で展覧会をやらないのか」と誘致を求める声が SNS 上でも散見されるようになっていた。周囲の期待に後押しされて展覧会開催の機運が高まってきたのを感じ、筆者は原田をはじめ県関係者と意見交換を重ねたが、開催断念の返事に ROIP はもはや動きを取ることができなかった。

落胆していたところ、翌 2021 年に急展開があった。九州陶磁文化館が開館以来 42 年ぶりのリニューアルオープン特別記念展として、巡回展の開催を決定したというのだ。一度は諦めた展覧会誘致が逆転した決め手に、個々人の声の力があつたことは否めないだろう。館長の鈴木由紀夫は、開会式を前にメディアのインタビューで「焼き物は傷ついても、宿る精神は傷つけられない」「ピアッティ家は陶片をよくぞ守って下さった。故郷で傷を癒して沢山のの人に愛でもらい、再びヨーロッパで可愛がってもらえますように」と語っている。

### 3-5. 世界をつなぐ

#### 3-5-1. G20 大阪サミット配偶者プログラム

学術調査の支援と展覧会開催の交渉以外にも、ROIP の活動は多岐に渡った。コロナ禍で対面での活動が大きく制約されながらも、文化イベントの運営と広報活動などを次々と実践していった。いずれも使用言語は日本語と英語を必要に応じて切り替え、分野横断的かつ国際的な視座を大切にしていた。その結果、学際的な文化活動として国内外で注目を集めることになった。

なかでも、G20 大阪サミット配偶者プログラムにて紹介されたことは、プロジェクトの意義を国際的に高めた<sup>27</sup>。粉々に砕かれた陶片は、観る者に戦争がもたらす痛みや悲しみを想像させ、平和について考えるきっかけを与える。会場で ROIP プロジェクトの経緯や目的が披露されると、「ばら

---

<sup>27</sup> 2019 年 6 月 29 日、G20 大阪サミット配偶者プログラム 2 日目昼食会。大阪市庁舎を江戸前鯨カウンターに仕立てあげて、ROIP が修復した古伊万里大皿で来賓をもてなした。手塚良則、神森真理子による監修。

ばらの陶片が一つに合わさるのは、各国が協調を目指すサミットと同じ」と来賓から称賛の声があがった。



左：©G20 大阪サミット 2019。右：配偶者プログラム 2 日目昼食会。

ROIP の活動と修復した古伊万里が来賓に披露された。

### 3-5-2. ピアッティ家来日と次世代シンポジウム

2020 年 11 月、大倉集古館での開幕に合わせて、ピアッティ家を日本へ招聘する計画をしていたが<sup>28</sup>、コロナウィルスの蔓延を抑えるため全国的に行動制限が強いられ、特に海外から日本への入国は厳しく制限されたため断念した。ようやく入国制限が部分的に緩和されたことで、2022 年 6 月、九州陶磁文化館での会期中に城主ガブリエル・ピアッティ<sup>29</sup>を日本へ招聘し、地域の人々との交流やシンポジウムを開催することに成功した<sup>30</sup>。ピアッティ家を代表して来日したガブリエルと ROIP メンバーを、佐賀県はあたたかく歓迎した（写真）。

---

<sup>28</sup> 東京倶楽部文化活動助成事業。コロナ禍による入国制限のため交付を辞退した。2020 年 11 月。

<sup>29</sup> アルフォンスとヴェレーナの長男。2021 年に家督を継いだ。義弟エルンスト・シュターレンベルグと共に来日。

<sup>30</sup> 2022 年東京倶楽部文化活動助成事業。ガブリエル・ピアッティ日本招聘と ROIP 主催「城主来日記念シンポジウム ～ガブリエル・ピアッティ氏と有田の次世代の対話～」を実施。2022 年 6 月。

城主来日シンポジウム<sup>31</sup>は、佐賀県議会議員の原田が佐賀大学の石井美恵と立案し、筆者に提案したことから実現した。目的は、学生たちがピアッティ・コレクションと ROIP プロジェクトについて学ぶことで、世界を身近に感じ、地域の産業を多角的に捉える視野を育むというものだった。当日、ROIP は美術館から講堂を会場として提供され、運営を担った。学生たちは、特別展の展示を観てから会場入りした。シンポジウムへ有田町の地域住民を無料招待したところ、来場者は定員を上回り、立ち見客も受け入れた。冒頭に筆者がプロジェクトの経緯を説明し、ガブリエルが城とコレクションの歴史を話した後、有田の次世代との対話を行った（写真）。ドイツ語通訳は有田町国際交流員<sup>32</sup>が担当した。日本語、英語、ドイツ語が行き交う会場は、終始和やかな雰囲気にも包まれた。

石井は博物館学の授業の一環として、学生たちとシンポジウムに参加した。そして、学生たちの国際感覚を育む狙いで、英語での直接対話にこだわった。学生は事前に英語で準備をした質問をし、ガブリエルはユーモアを交えながら真摯に応じた。参加した大学生は、「新型コロナウイルスの影響で対面で人と話すことが少なくなっていたため、とても貴重な機会となった」と感想を寄せた。また、「破壊された文化財にも人の心を動かすパワーがあることを感じた」「ピアッティ家の芸術と平和に対する想いの深さを感じ取れた」「破壊されたことで新たな美しさや美術品の持つ力強さを実感した」「美術品の『美しさ』とは何か。完成されているから美しいのではない」などのコメントが寄せられた。

参加した高校生の感想文には、「講演会を聞いて焼き物に対する思いに変化があった」「有田に対する気持ちがポジティブになった」など、地域の伝統産業の良さを見直す意見があった。また、「ガブリエルさんが『このシンポジウムは平和の象徴』と述べていて、全くその通りであると心から思った」「戦争の怒りと悲しみを知り、いつまでも平和であることを心から願う」「『物は壊れても歴史は壊れない』という言葉が心に残った」と、戦乱に巻き込まれた古伊万里から平和を考える機会に繋がったことが

---

<sup>31</sup> 県立有田工業高校セラミック科 31 名、佐賀大学芸術地域デザイン学科 15 名他、120 名が対面で参加した。

<sup>32</sup> ヴィンセント・ホイザ、ドイツ出身。

うかがえる。さらに、「『消えつつある文化を大切にする』というアドバイスが良かった」「自分の経験を次世代に受け継いでいきたい」「伝統を受け継ぐセラミック科の自分を誇りに思う」「有田焼のすごさがわかった」といった文化や産業の継承についての感想もあった。

3年間のパンデミックでマスク着用はおなじみの光景となっていたが、カブリエルも有田の学生たちとの直接対話を「意義のあること」とし、感激を隠せない様子だった。コロナ禍やウクライナ戦争など世界の情勢が緊迫していることも相まって、こうした機会の重要性を佐賀県の若い世代も肌で感じていたからだ。



左：県知事表敬訪問。ピアッティ家、佐賀県議員、ROIPメンバーと。



右：シンポジウムにて交流する有田の高校生とピアッティ家。

### 3-5-3. 再び奥へ、そして世界へ

パンデミック直前に、展示用の陶片を奥から日本へ移送できたことは不幸中の幸いだった。もし数ヶ月遅れていたら、物理的な往来の制約を受けて日本での展覧会は実現できなかったであろう。美術館はコロナ禍でも比較的 안전한外出先とされたこともあり、「海を渡った古伊万里」展は、述べ4万人を動員する大盛会となった。ピアッティ家が守り伝えてきた戦争遺産は、フェルディナンドの遺志とともに、遠く離れた日本にて広く共感された。2022年9月、日本での会期を全て終えた約700点の陶片群は、厳

重なる管理のもと、ロースドルフ城へ返却された。ROIP プロジェクトは設立時の目的<sup>33</sup>を達成し、その役目を終えた。

その後、日本での注目は奥でも反響を呼んだ。ウィーン応用美術大学のヨハナ・ルンケルが率いる研究チームは PEEK Project に採択され<sup>34</sup>、2022年12月、アートプロジェクト“Broken Collection<sup>35</sup>”が始動した。同プロジェクトは、ピアッティ・コレクションを活用した3ヶ年計画で、「陶片の間」の修復および専門家と学生によるワークショップを中心に研究が進んでいる。陶片を使った現代アート制作、ウィーンでの展覧会も計画されているという。同時に、歴史家によるピアッティ家のアーカイブ整理も始まった。

これに伴って、ROIP の活動は、日本を飛び出して新たな段階に入った。同年9月、筆者は同大学に招聘され、現地にてワークショップの講師を務めた<sup>36</sup>。陶片と出会い、何を読み取ったか。筆者の体験を通して、茶の湯の「侘び」<sup>37</sup>に通じる不完全の美について学生らと対話をした。また、奥出身の現代アーティスト、エルヴィン・ヴルム<sup>38</sup>も講師に加わったことで、筆者は、同氏と ROIP について意見交換をする好機を得た。ヴルムは、ピアッティ・コレクションについて「我々が壊された陶片と向き合うには時間が必要だった」とし、「日本の文化芸術にはいつもインスピレーションをもらっている」と、日本人が主導した再生プロジェクトを評価した。

---

<sup>33</sup> 3つのつなぐ「陶片をつなぐ、歴史をつなぐ、世界をつなぐ」を理念に、ピアッティ・コレクションの日本での周知と里帰り展を成功させること。

<sup>34</sup> PEEK Project, Programs for Arts-based Research, Austria

<sup>35</sup> "Broken Collection"は、ピアッティ・コレクションを活用したアートプロジェクト。ガブリエラ・クリスト、ヨハナ・ルンケル（ウィーン応用美術大学教授）。2022年12月～2026年予定。

<sup>36</sup> ROIP の活動報告とわび・さびについて講義。構内で茶道体験を提供し、シェーンブルン宮殿に特設された茶室 HETEROTOPIA を案内した。

<sup>37</sup> 日本の中世以降、不足の美を表現する。室町時代後期に茶の湯と結びつき、江戸時代の松尾芭蕉は侘びの美を徹底した。古くは万葉集に記述があるとされる。

<sup>38</sup> エルヴィン・ヴルムは奥出身の芸術家。代表作にファット・ハウス/ファット・カーがある。十和田市現代美術館所蔵。

ROIP は、ウィーン工科大学による茶室プロジェクト<sup>39</sup>にも協力し、シェーンブルン宮殿での茶会の開催や、ロースドルフ城への移築を支援した<sup>40</sup>。こうして ROIP を介して、奥の 2 つの大学とピアッティ家の三者がつながったことになる。茶室は今後、日本との絆の象徴として、陶片や新たなアート作品の展示什器として様々に活用されるという。さらに、2025 年の大阪・関西万博に向けて、城の陶片が再び日本へやってくる計画もある<sup>41</sup>。人々は、長い眠りから覚めたピアッティ・コレクションから目が離せない様子だ。

こうした動きを受けて、2023 年以降、ROIP は、ピアッティ家のパートナーとして、引き続き陶片コレクションの「再生」を日本側から支援することとした。国内では ROIP の活動がイノベティブであるとの評価から、筆者は国際的なビジネススクールにて登壇の機会を得た<sup>42</sup>。展覧会協力を終えた後も、ROIP が掲げた「陶片をつなぐ、歴史をつなぐ、世界をつなぐ」は形を変えながら循環し、分野横断的な波及につながっている。

#### 3-5-4. ロースドルフ城凱旋展と日本文化紹介

---

<sup>39</sup> “Learning from Japanese Teahouse”プロジェクト。日本の国宝待庵に学んだ若手建築家から公募し、同大学学生による茶室 HETEROTOPIA が選ばれた。2023 年 7 月～同年 9 月、シェーンブルン宮殿に特設。イリス・マッハ（ウィーン工科大学教授）、矢嶋一裕（建築家）。同宮殿日本庭園 110 周年記念事業・ウィーン万博 150 年記念事業。

<sup>40</sup> 筆者はシェーンブルン宮殿に特設された茶室 HETEROTOPIA 閉幕式にて公開茶会を担当し 100 名をもてなした。2023 年 9 月 2 日。

<sup>41</sup> 大阪・関西万博に出展予定のオーストリア館が、日奥の文化交流事業として ROIP を挙げている。2023 年 12 月現在。

<sup>42</sup> 慶應義塾大学大学院経営管理研究科主催 EMBA グローバルエグゼクティブ MBA コンソーシアム International Week。岡田正大。五大陸 10 校から 30 名参加。2023 年 9 月 13 日。上智大学短期大学部「日本の文化」。宮崎幸江。2022 年 12 月 11 日・2023 年 12 月 17 日、他。



2023年5月、ロースドルフ城美術館にて凱旋展“COME BACK FOR MORE!”が公開された<sup>43</sup>。筆者は開幕式典に出席するため、ROIPメンバーと渡奥した。会場にはロースドルフ村、ウィーンをはじめ欧州各地から200名を超える来場者が集まった。式典の冒頭挨拶で、筆者は、陶片コレクションの再生にかけた思いを伝え、ROIPの活動報告をし、ウィーン応用美術大学のルンケルにバトンを渡した。惜しみない賞賛の拍手が続いた。筆者は日本からROIPが働きかけたことで、破壊されたまま眠っていたロースドルフ城の陶片群に、新たな命が吹き込まれたことを実感し、深い安堵に包まれた。

式典の後、ROIPは城で日本文化イベントを主催した<sup>44</sup>。多くの来場者にとって初めて目にする茶会や書道体験に、会場の熱気は高かった。また、日本から筆者の茶道関係者27名も参加し、和装姿の団体は会場で話題となった。日本の展覧会で観たピアッティ・コレクションを、今度は「陶片の間」のインスタレーションとして体験して、参加者は言葉にならない感情を噛みしめている様子だった。「心が震えた」「ここに参加できたことを誇りに思う」と表現した人も複数いた（写真）。



左：式典にて。再生に掛けた思いとROIPの活動報告をする筆者。

右：式典にて。右から駐オーストリア日本国大使水内龍太、  
現城主ガブリエル・ピアッティ、筆者、カーリーナ夫人。

<sup>43</sup> ロースドルフ城 COME BACK FOR MORE!凱旋展では、およそ3年ぶりに日本から返却された陶片や修復された作品を展示。ウィーン応用美術大学主催。2023年5月～。

<sup>44</sup> 駐オーストリア日本大使館後援。日本万国博覧会記念基金事業採択、関西・大阪21世紀協会。2023年5月20日。



左：日本文化イベントにて書道体験。講師は ROIP メンバーで書道家の皆川彩雨、  
ベルリン在住。右：「陶片の間」インスタレーションを体験する一行。  
時空が交差する幻想的な風景をつくった。



シェーンブルン宮殿に特設された茶室 HETEROTOPIA にて献茶する筆者。  
塙若手建築家による設計。ROIP の仲介で茶室はロースドルフ城へ移築された。  
陶片の展示用什器として、2025 年関西・大阪万博への出展計画がある。

### 3-6. 文化活動の広がり と 資金調達

ROIP は活動を通して、メディアとの協働とオンラインツールの活用で、ピアッティ・コレクションの周知と展覧会の特別協力を具現化していった。また、コロナ禍で塞ぐ人々の気持ちを、ROIP の文化的な取り組みで前向きにできればと考えた。その手段として、メンバーの特技を持ち寄った結果、音楽会や伝統的な日本文化イベントが企画として持ち上がった。



ROIP Online Japanese  
TEA CEREMONY  
~ Beauty in Imperfectness ~  
Shards in Our Hearts, ROIP Japan  
November 23, 2021  
18:30-19:15(JST) Free

コロナ禍に実施した文化イベント。都内の茶室とロースドルフ城を  
オンラインツールでつないだ。多言語（日英独）使用。



左：大阪サミットでも紹介された修復品の古伊万里大皿に和菓子を盛る。

「陶片の間」では粉々の陶片だった。京都・織成館茶会にて。

右：ピアッティ・コレクションより、日本で修復した沈香壺。傷跡が歴史を物語る。

ROIP 広報のためイベントにて茶道具として活用。



文化庁の支援を得て、オンライン茶会<sup>45</sup>も試みた。イベントの告知は、世代間の特性を考慮して、シニア世代にはチラシなど手に取れる資料を、同世代以下はオンラインメディア掲載で情報を届ける工夫をした。展覧会が始まると、メディア掲載は述べ50社を超え<sup>46</sup>、個人のブログやSNSの書き込みが広報の後押しをした。筆者のラジオ出演<sup>47</sup>では、リスナーから激励の手紙が届くなど反応があった。多くが展覧会について報じる中で、一部のメディアが、ROIPを女性たちによるアートプロジェクトという切り口で特集した<sup>48</sup>。国際的な報道は、その後ROIPが海を越えて活動を展開する契機となった。特に、墺国営放送ORFや独通信社が、ROIPの取り組みと日本から戻ってきたピアッティ・コレクションについてドイツ語で報じたことは、ヨーロッパでの拡散力を高めた<sup>49</sup>。

ROIPは、協賛の全日空がコロナ禍に企画したオンラインツアーに協力した。試行錯誤の企画だったが、ウィーン、ロースドルフ城、有田、東京を結ぶバーチャル旅行は人気となった<sup>50</sup>。当初予定していた日程は、ウクライナ戦争が勃発したため延期して実施した。参加者はパソコンやスマートフォンを通して、地域の魅力に触れ、ROIPや展覧会の情報を得た。

---

<sup>45</sup> 文化庁 ARTS for the future! (コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業) 採択。茶会はROIPの活動周知を目的に、ホテルオークラ聴松庵にて対面とオンラインのハイブリッドで開催し盛会となった。2021年11月23日。

<sup>46</sup> 新聞、テレビ、ラジオ、雑誌など。オンライン記事も多く、通信社の配信は全国の地方紙掲載につながった。

<sup>47</sup> NHK ラジオ深夜便「明日へのことば」、2020年11月19日放送。2020年度ベストリスナーズセレクションに選出。

<sup>48</sup> 日経 xwoman 「家族よりも頼りになる：私の『最強』女友達」 「戦争で壊された古伊万里 里帰り展を実現した7人の主婦」2020年12月11日。NHK WORLD Japan, IN DEPTH, Destroyed Porcelain Units People in Peace, 2022年8月1日配信。

<sup>49</sup> オーストリア国営放送 (ORF)、ドイツ通信社 (dpa) 他。コレクションとROIPについてドイツ語による配信。

<sup>50</sup> ステイホーム中の試みとして実施されたが200枚のチケットは完売。旅の新しい形を提示した。2022年5月15日。

ROIPの活動資金は、各種助成金、企業の協賛、主催イベントやオリジナルグッズ販売の収益、そして賛同者からの寄付で賄った。ROIPが開発した商品は、プロジェクトに感化された高校生がデザインしたもので、ロースドルフ城の古伊万里をモチーフとした。また、ROIPは協賛企業とも連携して、城の古伊万里陶片をオマージュした帯締めなどの開発に協力した。これらをイベントやミュージアムショップにて販売し、収益は活動費に充当した（写真）。資金繰りは常に課題だったが、共感の輪が広がるほどに協力者を得やすくなっていった。助成事業は合計9本採択されたが、コロナ禍で計画の変更を余儀なくされ3本は辞退したが<sup>51</sup>、活動全般を通して、人件費以外の必要経費は賄うことができた。



高校生や協賛企業と連携して商品を開発。

イベントやミュージアムショップにて販売して収益を活動費に充当した。

## 4. 考察

### 4-1. 歴史的遺構の国際的活用事例としての考察

<sup>51</sup> 東京倶楽部文化活動助成事業 2020年、関西・大阪万博助成金事業 2020年、2022年。

ROIP は、他国の歴史的遺構を日本で活用、発展させたアートプロジェクト事例である。1945年の破壊以来、陶片群は塙の城主一家によって保管されてきた。しかし、その存在が広く国際的に知られるようになったのは、日本人の筆者が2015年に出会い、ROIPの活動があったからだ。なぜ、こうした展開になったのか。その理由を以下のように考察する。

1. ROIPの活動が共感を呼び、展覧会が盛況となった背景には、物に宿る精神性、そこから物語を紡ぎだす感性が、日本では社会全体で共有されたことが示唆される。陶片と出会った人々は、破壊行為に心を痛み、再生に希望を感じるなど、陶片に感情を投影して活動を支持した。筆者はこうした「モノをコト化する」（熊倉純子、東京藝術大学、2023）とも言える感性を、茶道を通して培ってきた。ピアッティ・コレクションと出会い、「侘び」に通じる不完全の美を見出して、再生プロジェクトを構想した。一方、欧州メディアからは「日本人はなぜ壊れたカケラに興味があるのか」という質問を度々受けた。彼らは完璧な美しさから程遠い粉々の陶片には、価値がないと判断するのかもしれない。
2. 物の見え方には、時代性が影響すると考える。戦争による痛みは消えるものではないが、時間の経過とともにある程度は癒えるものだろう。これに関して、ウィーン応用美術大学のルンケルも「世代が交代したことは大きい」と言及している<sup>52</sup>。第二次大戦時の城主フェルディナンドが陶片に投影した遺志を、塙の人々が受け入れるようになるには80年の歳月がかかった。結果として、筆者の陶片との遭遇と、日本のイニシアチブという異例の展開となったと考えられる。
3. 活動のための連絡や会議の手段として、オンラインツールの拡充と技術革新は、ROIPメンバーのような家庭の主婦に社会参画を促した。また、活動中に未曾有のパンデミックが災いした際も、ROIPはオンラインツールを活用することで、活動の場面と手段を柔軟に変化させて対応した。講演会や茶会などの文化イベントもオンラインで積

---

<sup>52</sup> 2023年9月、ウィーン応用美術大学 Broken Collection ワークショップにて。

極的に実施した結果、コロナ禍においても活動の勢いを止めることなく、さらには国際的な展開も実現することができた。

4. 2021年2月に勃発したロシアとウクライナの戦争が、ピアッティ・コレクションの存在感を高めた。ウクライナ戦争は情報戦とも言われ、戦況を伝える映像は日々人々のスマートフォンに届いた。このことは、人々に戦争を身近なものと感じさせ、平和への願いは地球規模で強まった。その結果、時代や国を超えてピアッティ・コレクションの持つ価値が伝わり、ROIPへの共感が広がった。
5. ROIPは、日本の憲法で保障されている「表現の自由」を行使し、第三国にまつわる歴史的遺構を独自の見解で活用した。個人が社会で表現する自由は、必ずしも万国共通ではない。しかし、ROIPを報じる国際メディアは多言語に及んだ。筆者は、ROIPのような平和志向の活動が国際的に共感されることを歓迎し、今後も広がることを期待する。
6. ピアッティ家とROIP、また事務局メンバー内の関係性は良好で、コミュニケーションはユーモアに溢れていた。プロジェクトを効率的に進める上で、関係者の信頼関係の構築が重要であることは言うまでもない。使用言語が日本語、英語、そして一部はドイツ語だったことも、国際的な文化活動へ発展できた要因と考える。

#### 4-2. ROIPメンバーの行動変容と社会的意義の考察

ROIPメンバーは、活動を通して「ローカルとグローバルを結ぶ視座で行動する主体(熊倉, 2014)」となった。そして、彼女たちが、短期間に爆発的な力を発揮した背景とその社会的意義の一つに、日本社会が長年に渡って抱えてきたフェミニズムの課題への挑戦があったことを指摘したい。再生プロジェクトを牽引したのが女性、主婦であったことは、世間から「意外」と捉えられた。既存の枠組みに当てはまらない彼女たちの活動には、当初、風当たりと賛同が入り混じった。

筆者が大学を卒業した1995年の日本社会は、専業主婦と共働き世帯が半

々だった<sup>53</sup>。30年が経過し、高齢化と少子化による労働力不足を背景に、女性の社会参画が叫ばれて久しいが、子育てや介護の担い手、年齢による就労条件など課題が残っている。さらに、制度は整うものの、歴史的・文化的な男性優位の社会構造と個人の無意識バイアス<sup>54</sup>が、この世代の女性たち、特に家庭に入ることを選択した主婦たちの言葉にならない無力感につながっていると筆者は考える。社会参画への壁を感じている女性たちを、筆者は注目されにくい社会的弱者と位置づける。

ROIPのプロジェクトメンバーには、こうした社会的弱者が含まれる。長年家庭や社会の補佐的な役割を担ってきた彼女らは、ROIPの運営を担うことで社会に対して主体的に参画し、その活動を通して自尊心と自己肯定感を取り戻していった。5カ年のプロジェクトを終え、再就職した者もいる。

「ROIPがなかったら今の自分はいない」「ここまで出来た自分を褒めたい」と語る彼女らには、自己肯定感に裏付けられた行動変容が見られた。筆者自身も専業主婦の期間が長く、育児中は本名よりも家族の名前で呼ばれることが多かった。子供の成長や家族の幸せを無上の喜びと感じる一方で、主体としての自分を見失いそうになっていた頃を思い返すと、ROIPと共に成長できたことを実感する。家族をはじめ、周囲の理解と協力も大きく影響した。今後もROIPのようなアートプロジェクトが、家庭に埋もれている女性たちを勇気づけ、社会へ主体的に参画する流れは歓迎されるだろう。

また、ROIPは新たな学びにつながるサードプレイスとしても機能した。このことは、ROIPの組織運営が、上意下達ではなく、ヨコの関係性とその広がりの特徴としていたことに起因するのかもしれない。メンバーは各々のペースで活動に関わり、支援者も自主的にプロジェクトへ参画した。

---

<sup>53</sup> 厚生労働省「専業主婦世帯と共働き世帯の推移」2014年、総務省「労働力調査特別調査」1995年。

<sup>54</sup> 様々な環境・集団から影響を受けて、無意識のうちに刷り込まれた価値観の偏り。男女共同参画学協会連絡会リーフレット「無意識のバイアス」より。



## 5. おわりに

2023年5月に城で催した茶席の掛け軸には「千里同風」を掛けた(写真)。この文言は、遠く離れた土地で思いが繋がることを示す。城主夫人のヴェレーナも、筆者との出会いを「城に吹き込む日本の風」と表現し、陶片の再生を見守った。奥の古城に眠っていた陶片と現代の日本人女性たちの生き様は、まるで相容れない二者のようだが、確かに交差し共創が生まれ、その影響は多方面に広がっている。これらの点から、フェルディナンドが残した陶片インスタレーションは、そのものがアートプロジェクトだったと定義できそうだが、このことはまたの機会に論じていきたい。



ロースドルフ城にて献茶する筆者。壁には千里同風の掛軸。

書道家の皆川が認め、ROIPに賛同したドイツ人が表装を担当した。

また、ピアッティ家は「憎むべきは戦争であり、兵士ではない」と主張する。平和への願いは、誰であっても決して否定されるものではないだろう。今後ピアッティ・コレクションに出会う人が、何を感じ、どのように行動するか。陶片が発するメッセージを、未来に希望をもって見守ってい

きたい。その過程で ROIP が、国際社会に小さな足跡を残せたのであれば幸いだ。

## 参考文献

荒川正明（監修）『今右衛門の色鍋島』朝日新聞社、2017

荒川正明（監修）『海を渡った古伊万里～ウィーン、ロースドルフ城の悲劇～』図録、2020

熊倉純子『アートプロジェクト - 芸術と共創する社会』水曜社、2015

鈴木由紀夫（監修）『明治有田超絶の美—万国博覧会の時代—』世界文化社、2015

古谷嘉章、石原道知、堀江武史（共著）『縄文の断片から見えてくる—修復家と人類学者が探る修復の迷宮—』古小鳥舎、2023

保科眞智子『そのままあるがまま as it is 暮らしにお茶を。』光村推古書院、2021

## 参考ウェブサイト

オーストリア・ロースドルフ城古伊万里再生プロジェクト [www.roip.jp](http://www.roip.jp)（最終閲覧 2023 年 12 月 31 日）

PIATTI <https://www.piatti.at>（最終閲覧 2023 年 12 月 31 日）

オーストリア国 大阪・関西万博 2025, Loosdorf Collection

<https://www.expoaustria.at/en/journal/schloss-loosdorf/>（最終閲覧 2023 年 12 月 31 日）

在オーストリア日本大使館 2023 年 5 月 20 日「水内大使のロースドルフ城における"COME BACK FOR MORE!"出席」

[https://www.at.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/12\\_taishi20230520.html](https://www.at.emb-japan.go.jp/itpr_ja/12_taishi20230520.html)（最終閲覧 2023 年 12 月 31 日）

同上 2023年9月1日「サマーレセプションの開催」

[https://www.at.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/12\\_taishi20230901.html](https://www.at.emb-japan.go.jp/itpr_ja/12_taishi20230901.html)（最終閲覧 2023年12月31日）

同上「レセプションにおける水内大使挨拶（英文）」

<https://www.at.emb-japan.go.jp/files/100548342.pdf>（最終閲覧 2023年12月31日）

オーストリア国営放送 ORF 2022年7月3日 Porzellan aus Loosdorf in Japan restauriert <https://noe.orf.at/stories/3162831/>（最終閲覧 2023年12月31日）

日経 xwoman 「家族よりも頼りになる」私の『最強』女友達「戦争で壊された古伊万里 里帰り展を実現した7人の主婦」2020年12月11日

<https://woman.nikkei.com/atcl/aria/feature/19/112600075/120800005/>（最終閲覧 2023年12月31日）

NHK WORLD Japan, IN DEPTH, Destroyed Porcelain Units People in Peace, 2022年8月1日配信 <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/liveblog/4/92/>（最終閲覧 2023年12月31日）

## **Contemporary Japanese Women's Efforts to Revive War Damage in Austria through Traditional Cultural Practices: The Case of the Reviving Old Imari Project at Loosdorf Castle (ROIP)**

HOSHINA Machiko

Department of Arts Studies and Curatorial Practices,  
Graduate School of Global Arts,  
Tokyo University of the Arts

The "Reviving Old Imari Project at Loosdorf Castle, Austria (ROIP, 2018-2022)" is a project in which a civic group, led by Japanese women, took the initiative to revive the collection of ceramic shards known as the "Broken Collection." This collection was destroyed by retreating Soviet troops during World War II and laid dormant in a castle near Vienna. ROIP empathized with the sentiments of the castle lord's family, positioning the ancient ceramic shards as a "symbol of peace," and built a network for the international recognition of the collection. Recognized as part of the Japan-Austria Friendship 150th Anniversary Project, ROIP engaged in various cultural activities, which transcended disciplines, including special cooperation in its world's first exhibition tour in Japan. The author considers that the traditional Japanese aesthetic of "wabi" was at the root of the spread of these activities. This obviously is represented in chanoyu, Japanese traditional art, which played a key role in the ROIP project.

The core members of the ROIP project are Japanese women in their 40s and 50s. Many of them previously identified with the traditional role of "stay-at-home mothers" in Japanese society and had few prior connection to artistic activities. However, through ROIP's efforts, their values and lifestyles underwent significant changes. This report focuses on the collaboration between the Piatti family who cherished the

Broken Collection, and the Japanese women members of ROIP, who provided key insights for the ceramic shard revival project through traditional cultural practices. Using ethnographic methods, the report further examines the impacts and social significance that the ROIP project has had on its members and stakeholders.

